特集　西海国立公園指定60周年記念　シリーズ九十九島【特別版】

「珍しい」九十九島

本市は現在「させぼ観光3しいGO！作戦」と題し、市民の皆さんとともに佐世保の「美しい」「楽しい」「美味しい」の3つの「しい」を発信しています。そして3月16日に、西海国立公園が指定60周年を迎えることを機に、九十九島の魅力を全国に向けて大きくPRしていきます。

今回の特集は「シリーズ九十九島」特別版。西海国立公園や九十九島の基本情報に加え、九十九島の4つめの「しい」として「珍しい」生き物、トビカズラ(植物)とカンムリウミスズメ(野鳥)を紹介します。

九十九島遊覧船「パールクィーン」から見ることができる諸島(もろしま)の奇岩

西海国立公園と九十九島

国立公園とは国が指定・管理する、次世代に引き継ぐべき日本を代表する自然の風景地のことです。現在、全国に31カ所あり、西海国立公園は昭和30年3月16日、日本で18番目の国立公園として誕生しました。

西海国立公園には九十九島、平戸島、五島列島などが含まれており、大小約400の島々が浮かぶ外洋性多島海と内湾の小さな島々などの景観が特色です。九十九島にはその約半数となる208の島が存在します。

刻々と変化する風景

島の密度が日本一の九十九島。各地の展望台から見る美しい夕景は、地元写真愛好家などの心をつかんで離さない風景となっています。また、九十九島遊覧船「パールクィーン」や小型遊覧船で巡るリラクルーズをはじめ、ヨットやシーカヤックなどで実際に海に出て見る九十九島は、展望台から見る優美な姿とは異なり、大自然の力強さや生命力を間近で体感することができます。

陸から眺める九十九島、海から眺める九十九島。どちらも、季節・日・時間、そして潮汐(ちょうせき)ごとに刻々と異なる色彩に包まれて、訪れる人の心に深く刻み込まれます。

西海国立公園誕生までの道のり

戦後、市ではまちづくりの重要な目標に「観光立市」を掲げ、九十九島を国立公園にしようとする運動が起こりました。その頃すでに国立公園指定の運動を始めていた県北や五島地域の関係町村に働き掛け、一体となって国立公園実現を目指す態勢を整えました。昭和25年に候補地の名称を「西海」と決定し、西海国立公園指定期成会を結成。以来、市・県・関係町村、学識者などが、公園化に向けた熱心な運動を展開し、昭和30年に西海国立公園が誕生しました。

天然のアートや生命を育む大自然

入り組んだ地形、青く波静かな海、緑豊かな島々には、ほかでは見ることができない風景があります。遊覧船などから見える美しい模様や形の岩は、堆積岩(砂岩)が気の遠くなるような長い時間をかけて風や波の浸食で削られたもので、人の手が加わらない自然が造り出すアートとして私たちの目を楽しませてくれます。

また、この島々には干潟や砂浜、磯もたくさん残っていて、貴重で珍しい動植物が息づいています。そしてその中には、全国的に見ると絶滅の恐れがあるものも少なくありません。

世代を超えて同じ風景を楽しむために

美しい風景や貴重な命の営みを次世代に引き継ぐための国立公園です。私たちの子どもや孫、その先々の代までが今と同じ風景を楽しむには、地元に暮らす私たちが、日常から気を付けるべきことがあります。右記の事項を順守し、誇るべきふるさとの大自然を残していきましょう。

美しい九十九島を引き継ぐために

ごみをきちんと処理する

九十九島は漂着ごみが多く、そこには家庭から出るごみが川をつたって流れ着いたものが多く含まれます。漂着ごみは景観を損なうだけでなく、小さな生き物の命にかかわることが少なくありません。ごみ出しの際は散らからないよう処理を行い、レジャー先でのごみは必ず持ち帰りましょう。

植物や動物を採らない、傷付けない

「きれいだから」「珍しいから」と動植物を持ち帰ることは絶対にやめましょう。市の花「カノコユリ」も、実は環境省のレッドリスト絶滅危惧Ⅱ類に選定されている貴重な花です。

九十九島の代表的な「3しい」～美しい・楽しい・美味しい～

美しい！夕焼けと島影

楽しい！クルージング

美味しい！海の幸

1九十九島八景の石岳展望台から臨む夕景 2パールクィーン、カヤック、ヨットなど、多彩なクルージングメニューがある九十九島。4月からは「みらい」も就航(12ページ参照) 3九十九島の海で育つ、九十九島かき(左)と、九十九島とらふぐ(右)

どこから来たのか謎多き神秘の花
トコイ島のトビカズラ

トコイ島のトビカズラの花（平成25年5月撮影）

トビカズラはマメ科トビカズラ属の熱帯性常緑つる性植物で、原産地は中国です。トコイ島のものは平成12年9月に熊本県の相良に続く2番目の生育地として発見されました。花はブドウの巨峰のような色で、独特の匂いがあります。

平成12年度の調査で発見

平成12年度、本市が取り組んだ「九十九島キャンペーン2000」の一環で行った九十九島基礎調査。その中の「陸上生物実態調査」をさせぼパール・シーから委託されたのが「ふるさと自然の会」でした。会を運営している川内野善治さんはこのときの調査で、市職員とともに九十九島全島をまわり、全ての島に上陸しました。そして9月、トコイ島でトビカズラを発見することになります。

「なんか少し違うよ。上陸してみゅうで」

発見のきっかけは、「クズのえらい茂っとるね」「なんか少し違うよ、上陸してみゅうで」そんな会話からでした。

調査でトコイ島付近を通ったのは朝。クズの葉は光らないのですが、船から見るとトコイ島を覆う緑がキラキラ光っていたことに違和感があったそうです。上陸した川内野さんが見たものは、広範囲にわたり茂っている野生化したマメのような植物。日頃見ていた植物図鑑を頭に巡らせ疑問に思った川内野さんは、葉とツルを標本として採取し、帰宅後図鑑で確認します。その時点で葉の形態はトビカズラに一番近かったそうですが、近縁種のウジルカンダの可能性も否定できなかったため、その後さまざまな所に問い合わせ、原産地の中国からも情報を得て確認を続けました。そして同年4月、開花時期にトコイ島に調査に行き、花を見て、トビカズラであることが確定しました。

1 海側から見たトコイ島。奥の山の表面を覆っているのがトビカズラ 2 人工授粉してできたトビカズラの種子 3 トコイ島のトビカズラの発見者、ふるさと自然の会・川内野善治さん 4 人工授粉してできたトビカズラの果実 5 長尾半島に植えられたトビカズラ。歩いて見に行くことができ、間近で観察できる

トビカズラは、一体どこから来たのか？

中国原産のトビカズラが一体どうやって九十九島に来たのか？これは現在も謎のままです。仮説としては

①はるか昔、日本列島が中国大陸から分かれる前の生き残り（遺存説）

②中国から果実が海を渡り漂着した（漂着説）

―ということが挙げられるそうです。

川内野さんは、トコイ島以外の九十九島の島を全て調べましたが、ほかの島ではクズは茂っているものの、トビカズラは確認されませんでした。トコイ島への漂着説を考えるに当たり、人工授粉によって結実した果実を使って、海水に浮かべる実験なども行い、長期間浮くことが確認されました。

国内2例目の生育地、トコイ島から長尾半島へ

トコイ島で発見されるまで、トビカズラは熊本県山鹿市菊鹿町相良の樹齢千年と言われる1株だけでした。トコイ島での発見当初、生育範囲は約7千平方メートルほどでしたが、栄養繁殖（※1）をするために繁殖力が旺盛で、その後大きく拡大しているようです。現在は九十九島ビジターセンターでも調査を行っていて、成長の様子などを記録し、人工授粉にも引き続き挑戦しています。

また、九十九島パールシーリゾートから歩いて行ける長尾半島では、間近でトビカズラを見ることができます。これはトコイ島での発見後、人工授粉に成功したものを平成19年に植樹した株で、4年半かけて開花に結び付きました。開花時季は4月中旬～5月初旬頃（目安）です。ことしはぜひ、珍しいトビカズラの花を見に、長尾半島でウオーキングなどいかがでしょうか。

※1 栄養繁殖＝種子からではなく、根・茎・葉などの栄養器官から繁殖すること。

九十九島にペンギンそっくりな鳥？
カンムリウミスズメ

海上を泳いで移動するカンムリウミスズメ（1月13日撮影）

カンムリウミスズメは日本近海だけに生息する海鳥で、国の天然記念物に指定されています。九十九島では平成20年12月に初めてその姿が確認されました。冠のような頭の長い毛と、ずんぐりとした体形がとても愛らしく、まるでペンギンを思わせます。

泳ぐのが一番得意な鳥

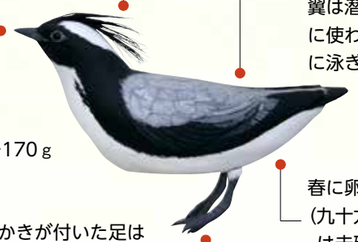
カンムリウミスズメはその一生のほとんどを海の上で過ごします。陸に上がるのは、繁殖期だけで、移動はよちよち歩き。飛ぶことはできますが、海面すれすれをはばたき、空高くは飛びません。ペンギンと同じく、水上・水中が一番得意なフィールドで、特に潜水時はまるで飛ぶように泳ぐことができ、小魚を捕って食べています。

絶滅の恐れがあり、定期調査を行っています

九十九島ビジターセンターで個体数や見付けた場所などの調査・記録が行われているカンムリウミスズメは、環境省レッドリスト絶滅危惧Ⅱ類（絶滅の危険が増大している種）にあげられ、また国際的な保護鳥となっています。日本周辺と韓国南部に生息し、個体数は数千羽と推定されている大変珍しい鳥です。

同センターでの調査は、その姿がよく見られる11月～3月を中心に月2回行われており、船上から波間に浮かぶ小さな姿を、双眼鏡や目視で確認しています。調査を担当している田川澄子さんは「カンムリウミスズメは生態に謎の部分が多いんです。九十九島にどれくらいいるのかもまだ分かりませんが、昨年12月23日の調査では1日に42羽を確認しました。これからもこのような野鳥たちが九十九島で元気に暮らすことができるよう、調査だけでなく環境に関する啓発活動も行っていきたいです」と話しました。

カンムリウミスズメの特徴



- 海に潜って小魚を捕り、食べている。「ピィピィ」とかわいい声で鳴く
- 頭には冠のような長い毛が生えている
- 空を飛ぶのは苦手。翼は潜水時に効果的に使われ、飛ぶように泳ぎ、餌を捕る
- 体長 約25㎝
  体重 約150～170ｇ
- 春に卵を生む（九十九島での繁殖は未確認）
- 水かきが付いた足は少し後方にあり、泳ぐのに適している

※写真はビジターセンター所蔵の模型です。

1九十九島ビジターセンターでカンムリウミスズメの調査を担当する田川澄子さん。調査結果などは随時ブログ（http://www.kujukushima-visitorcenter.jp/）にアップしている2飛び立つカンムリウミスズメ

九十九島で幼鳥の姿も確認

カンムリウミスズメは無人島の崖や急な斜面の岩の間などで繁殖します。卵は1～2個産み1カ月抱卵した後、ふ化したひなはわずか1～2日のうちに海に転がり落ちて自分の力で泳ぎ始めます。餌も洋上で親鳥から与えられ、次に陸に上がるのは繁殖地に戻るときです。

平成22年12月、ビジターセンターの定期調査で確認されたカンムリウミスズメの中に幼鳥らしい姿があり、ニュースとなりました。九十九島以外から幼鳥が飛来したとは考えにくいため、九十九島での繁殖の可能性がありますが、その確認はまだ取れていないそうです。

調査に同行し、12羽を発見

1月中旬、波が穏やかな日に、調査に向かう船に乗船しました。スタッフ3人と海面を見つめてその姿を探しますが、体長約25㌢といえばティッシュの箱くらいの大きさ。海の広さに加えて船の揺れと波で、なかなか容易には見付けることができません。そんな中、突然船が止まりました。小さな声で「そこ！」と指さされた先には、2羽のカンムリウミスズメが、仲良く並んで泳いでいました。白黒模様の、まるでペンギンのような姿です。首をかしげたり、振り向いたりする仕草がなんとも愛らしかったのですが、船に気付いたのか、こちらの様子を気にしながら少しずつ離れていき、最後はバタバタと羽を動かして飛んでいきました。

調査に出ても1羽も見ることができない日もありますが、この日は幸運にも、この2羽のほかに10羽の群れも確認でき、計12羽を見ることができました。

取材日　1月13日

問九十九島の観光について⇨観光物産振興局☎24・1111
問九十九島の自然について⇨九十九島ビジターセンター☎28・7919